

体系的・継続的な教育実践経験を通じた教員養成

—専門科目「小学校教育フィールドワークⅠ・Ⅱ」の意義と課題—

小川由美* 上地完治* 上村 豊* 道田泰司* 村上呂里*
浅井玲子* 小田切忠人* 加藤好一* 藤原幸男* 吉田安規良*

Teacher education through the systematic and continuous experience of educational practice
—Significance and problems of "On-site elementary school fieldwork I and II"—

Yumi OGAWA* Kanji UECHI* Yutaka UEMURA* Yasushi MICHITA*
Rori MURAKAMI* Reiko ASAI* Tadato KODAGIRI* Yoshikazu KATOU*
Yukio FUJIWARA* Akira YOSHIDA*

はじめに

琉球大学教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース教育実践学専修は、教育課程の理念として、「早期から系統的な教育実践経験を継続的に積み重ね、実践と理論とを往還的に学ぶ機会を繰り返し提供する」ことをめざしている。教育実践学専修の概要とその特色あるカリキュラムについては『日本教育大学協会研究年報』第30集にも掲載されている⁽¹⁾。本報では、その特色あるカリキュラムの中から、専修専門科目で必修の実習科目でもある「小学校教育フィールドワークⅠ」（以下「FWⅠ」と略記）及び「小学校教育フィールドワークⅡ」（以下「FWⅡ」と略記）に焦点をあて、このFWⅠならびにFWⅡが従来の教育実習体系の間隙を時系列的にも内容的にも埋めて、体系的・継続的な教育実践経験を通じた教員養成のために非常に有意義であることを示したい。

1. 教員養成教育カリキュラムにおける

FWⅠ・FWⅡの意義

琉球大学教育学部学校教育教員養成課程は、「小学校教育コース」「小・中学校教科教育コース」「特別支援教育コース」から構成されており、小学校教育コースと小・中学校教科教育コースの違いは、養成しようとする教員の姿に表れている。小・中学校教科教育コースでは、従来の教科教育を中心とした教科ピーク制によって、特定の教科に関する深い専門性をもった小・中学校教員の養成を目的としている。それに対して、教育実践学専修のみで構成されている小学校教育コースでは、「小学校教員として必要な授業力や学級・学校を運営する力を身につけ、それを基盤として、教科のみならず、教科外活動や教科の枠を越えた総合的实践力を発揮することで、豊かな学びを構築し、子どもたちの『生きる力』を育成できる小学校教員」の養成がめざされている。つまり、教育実践学専修におい

*琉球大学教育学部教育学実践学教室

て育成しようとする教員の特徴は、総合的実践力という言葉で表現することができる。そして、この総合的実践力を学生に身につけさせる教育カリキュラムとして、「早期から系統的な教育実践経験を継続的に積み重ね、実践と理論とを往還的に学ぶ機会を繰り返し提供する」ことを重視している。

教員養成において実践的な能力の育成を重視する傾向は、琉球大学の学生に限らず、教員志望の学生一般にみられる傾向であるといえる。たとえば、中国四国地方及び関西・九州地方の国公立大学 16 校において教職課程履修者の教職意識を調査した山田浩之らの研究には、こうした傾向が顕著に表れている⁽²⁾。この調査からは、教員志望の学生たちが非常に多くの割合で、「教職に就くには、大学の授業より、実際に子どもと接する体験の方が役立つ」、「教職に関する授業は、演習や実習の時間を増やした方がよい」、「教職に関する授業では、理論的なものより、実践的な内容を扱う方がよい」と考えていることがうかがえる(表 1 参照)。

教員養成において実践力の育成を重視する傾向は近年特に顕著となってきており、四年制大学では 2013 年度から実施される「教職実践演習」の新設もこうした動向に即したものであるといえよう。周知のように、この授業科目は学生が教員として最小限必要な資質能力を身につけているか確認することを目的としている。しかも、教職実践演習の特徴は、教員養成教育の最終学期といういわばカリキュラムの出口の段階で、教員として最低限必要な資質能力が身につけているかチェックすることだと強調され

ている。それに対して、FW I・II を必修の専修専門科目として位置づけるねらいは、カリキュラム全体を通じた総合的実践力の育成にある。

そもそも教育実践学専修が小学校教員養成の強化を目的として 2010 年に新設されたという経緯があり、FW I・II はその教育実践学専修のカリキュラムのいわば「目玉」として 2010 年度から開設されている。2010・2011 年度は学生 27 名を附属小学校(1 学年 3 クラス)にほぼ均等に配置し、大学教員 6 名が学生の支援やケア、それに FW I 全体の計画実施を担当した。一方、FW II では 4~5 名の大学教員が学生の支援・ケアのみならず、受け入れ校の選定にかかわる教育行政との交渉や受け入れ校への挨拶などを担当した。

FW I は 2 年後期に附属小学校で、FW II は 3 年後期に公立小学校で実施される実習科目である。この 2 つの実習科目を設定することで、教育実践学専修のカリキュラムは、教職体験 I (1 年後期/養成課程共通) → 教職体験 II (2 年前期/養成課程共通) → FW I (2 年後期) → 学校教育実践研究(教育実習の事前事後指導科目)(3 年前期・後期) → 教育実習(3 年夏季休業中) → FW II (3 年後期) というように、教員志望の学生に対して学校現場で学ぶ機会を途切れることなく提供することを可能にしている。

もちろん、このことは単に実習的な科目が途切れることなく連続しているということだけを意味しているのではない。FW I は教育実習前の体験的な学びの場という意味合いをもっている。本学の教員養成課程の学生ならば、通常 3 年の夏季休業中の教育実習になってはじめて

表 1 教職課程の履修に関する意識

	とてもあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	合計 ()内は総数
教職に就くには、大学の授業より、実際に子どもと接する体験の方が役立つ	40.3%	48.4%	10.6%	0.6%	100% (1,480 名)
教職に関する授業は、演習や実習の時間を増やした方がよい	31.3%	48.3%	17.6%	2.8%	100% (1,480 名)
教職に関する授業では、理論的なものより、実践的な内容を扱う方がよい	30.9%	55.4%	12.9%	0.7%	100% (1,481 名)

出典：山田浩之・櫻田裕美子「教職意識の特徴」藤井泰・作田良三編『地域発展を担う教師の養成段階における能力形成過程』松山大学総合研究所、2012 年、28 頁より一部抜粋。

「観察」以上の実践的な学びを体験する。そのため、教育実習の意義を、「学生がまずやってみることにある」と考えている実習関係者もいる。それに比べて、教育実践学専修の学生は、2年後期に朝の学級活動（朝の会）や授業を実際に体験することができる。より厳密に言えば、朝の会や授業の指導に「失敗する体験」をすることができる。この失敗体験こそが FW I において期待されていることの1つなのである。学生は FW I での失敗体験を糧に教育実習へのモチベーションを高めたり、教育実習での自らの課題を設定したりすることができるのである。以上をまとめると、FW I では、学校教育実践の「観察」を深めるとともに、自分で実践を「試す」段階へと移行することを目的としている。

そして FW II では、教育実習で学んだことや体験したことを公立小学校で再度考えたり試したりする機会として位置づけられる。それは、「教育実践の理解や技能を反省的に深め、教育

実践力をさらに高めることを目的とする」と『琉球大学学生便覧』には規定されている。つまり、FW II での学びのキーワードは「反省」すなわち「振り返り」である。FW I や教育実習で観察・体験してきたことの中からは、「各自の課題」を設定し、振り返ることを通して教育実践の理解や技能をさらに深めていくことが求められているのである。また、FW II では教育実践のフィールドが附属小学校から公立小学校へと変わることにも大きな意味がある。附属小学校と公立小学校での経験の対比を通して、学校文化、地域性、教師、児童集団による差異や類似・同一点とそれに対する担任教師の教育実践活動について、FW II ではさらに深く学ぶ機会が提供されているといえる。

2. FW I の概要・成果・課題

FW I では、学生は附属小学校の全クラスに1～2名ずつ配置され、附属小学校教員の協力の

表2 2011（平成23）年度 FW I 授業内容

回	場所	担当者	活動内容	詳細
1	大学	学部教員	オリエンテーション	FW I の授業内容について説明する。
2	大学	学部教員	指導案の作り方（1）	指導案の意義や作成の仕方について、大学教員が指導する。また、第5回に予定している公開添削へ向けて、指導案作成の課題を示す。
3	附属小学校	附属小学校教員	担任との顔合わせ	学生が附属小学校へ挨拶に行き、学級活動体験（朝の会）で何をおこなうか打ち合わせる。
4	附属小学校	附属小学校教員	学級活動体験1	学生は朝の会で1分程度の自己紹介をし、1校時の授業を観察する。
5	大学	附属小学校実習主任＋学部教員	指導案の作り方（2）	附属小学校実習主任が中心となって公開添削をおこない、初歩的な間違いを指摘することで、指導案の書き方の基本や留意点を学ばせる。
6	附属小学校	附属小学校教員	学級活動体験2	朝の会を実際に行う。1校時は授業観察。
7	附属小学校	附属小学校教員	学級活動体験3	朝の会を実際に行う。1校時は授業観察。
8	附属小学校	附属小学校教員	学級活動体験4	朝の会を実際に行う。1校時は授業観察。
9	大学	附属小学校実習主任＋学部教員	模擬授業	第5回の授業で添削された指導案で各学年5分ずつ模擬授業をおこない、模擬授業の行い方の基本や留意点を学ばせる。
10	附属小学校	附属小学校教員	学級活動体験5	朝の会を実際に行う。1校時は授業観察。
11	大学	学部教員	教材研究	教材研究を低・中・高学年別に分かれて行う。
12	大学	学部教員	指導案検討	指導案検討を低・中・高学年別に分かれて行う。
13	大学	学部教員	模擬授業	模擬授業を低・中・高学年別に分かれて行う。
14	附属小学校	附属小学校教員	授業実践体験＋振り返り	全学生が授業を45分行う。放課後のリフレクションタイムに担任と学生で振り返りを行う。
15				
16	大学	学部教員	最終発表会	FW I ・ II 合同で最終発表会をおこなう。また、1年生にも司会を依頼し、積極的な参加を促す。

※附属小学校でおこなわれる場合も、学部教員は可能な限り参加する。

もと、さまざまな活動を通して学ぶ機会が提供される（表 2 参照）。

FW I の概要と、2010・2011 年度に実施した学生たちの感想などを、FW I のねらいである「観察」と「試す」というキーワードに即して説明してみたい。

(1) 「観察」を通した学び

FW I では、朝の会とそれに続く 1 校時の授業観察が最低 5 回は設定されている。学生は 1 年後期の教職体験 I や 2 年後期の教職体験 II で附属小学校や公立学校を訪問する機会を得ているが、FW I では半年間に渡って定期的に学生と子どもたちが顔を合わせ、教育的な関係を切り結ぶため、必然的に両者の交流は密なものとなり、子ども理解も深まることが予想される。また、1 クラスに配置されている学生数は 1～2 名と少数のため、学生は朝の会や授業を観察した後、疑問点などを担任教師に直接質問し、指導を受けることが可能である。

観察の焦点は授業の見方へも向けられる。ある学生は、FW I によって「授業を観察する視点」を強く意識するようになったと述べている。

学生の振り返り（「観察」に関わって）

- 授業を見学する際に、「何を見るのか」という意識を持つべきであることを、強く実感することができた。
- つつい、担任の先生の行動や指示の仕方に目がいってしまいがちだが、子どもの表情を見ることも必要です。なぜなら、実際に自分が授業した時に、子どものどのような表情の時ならわかっているのか、どのような表情の時ならわかっていないのかを見極める目安をみつけることができると思うからです。

(2) 「試み」としての FW I —朝の会の指導体験—

FW I には 2 つの貴重な「試み」が学習機会として設定されている。第一の試みは、朝の会の指導である。教職体験 I や教職体験 II では授業観察が主たる活動であるため、学生は FW I で初めて実際の子どもたちを前にした「指導」を体験することになる。朝の会を実際に指導し

た学生は、ほとんどが「思うようにいかなかった」という失敗体験をすることになる。この失敗体験を経ることで、教師の指導を子どもが聞いて学習活動を展開するというありふれた授業風景が、学生にとってはいかに難しいことであるか身をもって体感し、担任教師の指導力を「盗みたい」という動機づけにつながっている。

朝の会の指導は、最低でも 2 回体験することができる。第 1 回目で失敗した学生も、その反省を第 2 回目の指導へと活かすことができる。また、こうした朝の会の指導体験が、FW I の学習の集大成である授業実践体験へとつながっていく。

朝の会の指導をおこなって（A さんの場合）

子どもたちの前に立つことにまずは慣れるために、1 人 2 回朝の会を受け持ちました。どのくらいの時間が与えられるのか、どんなことをするのかは各クラスで異なります。私のクラスでは、どんな活動をしていても良いが、「必ずねらいや意図をもって取り組むこと」というのが担任の先生からの条件でした。初めての朝の会はとても緊張しましたが、授業をする前段階として、子どもたちの前に立つ経験や、子どもの発言への切り返しの難しさを体験することができました。

朝の会の指導をおこなって（B さんの場合）

私は、1 回目の朝の会のときに手話をしました。その時に、すぐに手話のレクチャーを始めてしまいました。その後のリフレクションで「手話をしよう」と思ったきっかけや、始めた頃やできたときの気持ちを話すと、子どもたちが同じような気持ちを感じたときに、この朝の会を思い出す時があるよというアドバイスをもらいました。

(3) 「試み」としての FW I —授業実践体験—

第二の試みは、授業実践体験である。45 分間の授業を実際に子どもたちに対しておこなうこの体験は、文字通り FW I の「目玉」であり、学生にとって FW I の最終的な目標となっている。もちろん、学生たちはいきなり授業をするわけではない。2011 年度の場合、学生たちは大学教員から指導案を作成する意義やその書き方の概要を学び（第 2 回授業）、自分たちが作成した指導案を附属小学校の実習担当の教員に公

開で添削してもらい（第 5 回授業）、模擬授業を実際におこなってみて、授業の仕方の基本を学んでいく（第 9 回授業）。その後、授業実践体験で取り扱う教科・単元を担当の教員と相談して決定し、教材研究・指導案検討・模擬授業を学生同士でおこない、必要に応じて学部教員も加わる（第 11～13 回授業）。このようなプロセスを経て、学生たちは「本番」を迎えるのである（第 14・15 回授業）。

学生の振り返りからは、彼らが FWI と教育実習との結びつきを強く意識している様子がうかがえる。多くの学生が、教育実習前に授業実践を体験することで、教育実習への心構えができたと考えている。それは授業の難しさや、授業準備の大変さを実感することであり、同時にまた教育実習へのモチベーションの高まりへとつながるものでもある。

学生の振り返りは、授業実践体験を通して学生たちが豊かな学びをおこなっていたことも示している。琉球大学教育学部附属小学校が「対

話で学ぶ」、「子どもの姿から授業をつくる」という課題意識に基づいて授業研究を蓄積していることから、学生たちもそのような授業づくりが重要であることに、実際に授業をおこない失敗を体験するなかで気づきつつあるようである。彼らは、「指導案の流れに縛られるのではなく、児童と授業をしながら臨機応変な対応をすること」の重要性に気づいたり、「子どもの意見に対して、子どもに質問させて授業展開していく」ことや「児童に『考える時間』を十分に与えてから答えや考えを聴きだす」ことが授業のポイントだと学んでいる。

附属小学校の教員からの評価も良好で、「1 時間の授業づくりに一生懸命で、誠実さを感じた」、「実習生同士で情報交換をしている声も聞かれ、本実習でも協力し合いながら進めていけると感じた」という評価を得ている。実際、教育実習における附属小学校教員からの評価は高い。本実習において、教育実践学専修の学生と他の実習生の総合評価を比較すると、A 評価が多かつ

学生の振り返り（授業実践体験に関わって）

- 第 1 時では、導入部分では児童の食いつきがよかったのですが、あとは終始、辞書で漢字を調べ意味を調べての繰り返しだったので、児童同士の会話がありませんでした。そのため、私自身授業をしていて息苦しく、子どもたちも発言の場がなく息苦しいように見えました。また、授業の流れを間違えて、まとめの内容を変更してしまったので、結局、その授業のまとめにならずに授業が終わってしまい、とても心残りのある授業になってしまいました。
- 授業の指導案、教具づくりをして、時間がかかること・大変さを知った。
- 子ども一人ひとりを見すぎてしまって、全体を見れなくなってしまうという問題があった。
- 指導案の作成から実際の授業、そしてその後の反省会までの流れを、教育実習前に経験できたということは本当によかったと思う。
- 子どもと授業を作るという楽しさを感じることができた。教育実習に向けての教師としての意識が高まった。
- 次年度の教育実習に向けて、自分にたくさんの課題を出すことができました。
- 簡単に「正解」という言葉を使ってしまった。しかし、この言葉は他の意見をすべて「間違い」と否定してしまうことになるので、安易に使うのはよくないと思った。
- 授業をして、自分自身が楽しめて、机間支援もこまめにすることが出来ました。一方で、活動するときの時間の切り方や使い方が上手くいかなかったり、指示が的確でなかったので、次回につながる反省点も見つかりました。
- 指導案の流れに縛られるのではなく、児童と授業をしながら臨機応変な対応をするということも重要だと思いました。
- 児童と接するなかで、児童にわかりやすい発問をしなければならないということなど、小さな出来事から大きな課題が見つかりました。日頃から、他者と積極的にかかわり、相手に伝わるように話すなど、意識することで、まずは小さな課題から解決していきたいと考えました。
- 子どもの意見に対して、子どもに質問させて授業展開していくことを学んだ。子ども同士で意見を言い合うことで、授業の展開を行う。そうすることで、子ども達が自分で考えることが出来る。思考力が上がる。
- 高学年は、発問や質問を投げかけても、すぐに答えてくれることが多くありません。そして、その「シーン」とした瞬間が気まずくて、ベラベラ喋りすぎてしまうことがありました。その様な授業は、先生だけが喋る一方的な授業になってしまいます。そうならないために、児童に「考える時間」を十分に与えてから答えや考えを聴きだすことがポイントだなと思いました。

た ($\chi^2=7.36, df=2, p<.05$)。また本実習は10の観点で評価がなされるが、全体的に平均値の高い2観点を除いた8観点を、教育実践学専修の学生の平均値が高いという結果を得ている(表3参照)。

表3 観点別の平均値の比較

評価項目	実践		t値	有意
	学専修	他専修		
自覚・態度	4.34	> 3.88	2.47	p<.05
コミュニケーション力	4.48	> 4.26	1.28	n.s.
記録簿の整理	4.38	> 3.97	2.39	p<.05
授業観察のまとめ	4.52	> 3.91	3.54	p<.01
学習指導案	4.03	> 3.65	2.62	p<.05
教材・教具の準備	4.21	> 3.82	2.12	p<.05
教材・教具の活用	4.17	> 3.79	2.19	p<.05
声の大きさ、発問	4.21	> 3.88	1.97	p<.10
省察・フィードバック	4.24	> 4.06	1.13	n.s.
学級経営	4.10	> 3.85	1.86	p<.10

表4 FWIIの実施期間及び活動内容

実施体制	学生数：約30名(配属学校4~6校) 担当教員数：5~6名
実施期間	1.オリエンテーション(7月) 2.配属先公立学校訪問(7月・8月) 3-12.配属先公立学校における実習(10月-2月までの期間、90分×10回分) 13.活動のまとめ・成果発表会準備(2月) 14-15.成果発表会(3月、成果報告書提出)
活動内容	・普通学級、特別支援学級での学習支援及び指導(状況に応じて授業実践も行う) ・担任教諭のサポート ・学校行事(運動会など)への参画 *その他、学校で行われる様々な教育活動
主な学習内容	・学校文化の違いについて(学校規模・地域性、業務量・内容、教師の対応等) ・大学で得た知識の実践的な活用
教育実習との違い	教育実習： 主に授業や教材分析、子ども理解等 FWII： 授業だけではなく、事務作業や行事といった特別活動の準備等、 <u>教師が行う全ての教育活動</u> を体験する。

3. FWIIの概要と成果及び課題

(1) FWIIの概要

FWIIは、3年後期(教育実習直後)の時期に、主に琉球大学近隣の公立小学校において実施する教職体験実習である(表4参照)。

2011年度は、近隣の公立小学校6校の他に、学生の母校である石垣島と渡嘉敷島といった離島へき地地区にある小学校2校でも実施した。FWIIは、FWIや附属小学校での教育実習における実習経験の積み重ねから見えてきた「各自の課題」をふまえて、公立小学校での教職体験実習に入る点が大きな特色である。つまり、FWI→教育実習と実習経験のステップを踏むことで得られる「各自の課題」が、ここでの学びの出発点となる(図1参照)。

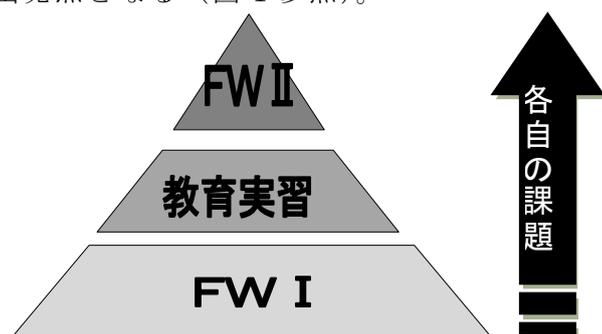


図1 実習経験のステップ

先述したように、『琉球大学学生便覧』にはFWIIのねらいが、「教育実践の理解や技能を反省的に深め、教育実践力をさらに高めることを目的とする」と記されている。FWIIでの学びのキーワードは「反省」すなわち「振り返り」であり、「各自の課題」を踏まえて段階的に広い視野と柔軟な実践力の育成がめざされている。

こうしたねらいに基づき、2011年度のFWIIでは、①学校文化や地域性、教師や児童等の共通点・相違点を見出すこと、②現場の実態に応じた教師の教育実践活動について体験を通して学び、深く考察することを特に意識して実習が行われた。

FWIIにおける学生の学びを見取るために、公立小学校での観察や教育実践を通して得られた学びや気づきを記録簿(学習記録ノート)に蓄積し、必要に応じて大学教員とリフレクシ

表 5 FWⅡオリエンテーション時の「各自の課題」と活動内容との関連

	《子ども》	《教師》	《学校》
各自の課題	「子ども個人個人をきちんと見られるようにしたい。」 「教育実習では、児童理解が授業をする上で大切になってくるということに気がついた。始めから意識して積極的に関わりたいです。」	「担任と児童、実習生と児童の関係の違い。教師の手立て、声かけ、働きかけを中心にしたい。」 「授業だけでなく、学級の取り組みや学級担任の学級への手だて、クラスのルール等、学級活動に関することに目を向けていきたい。」	「公立学校の雰囲気や、事務などの教師の見えない仕事を体験すること。」 「附属と公立小学校の違いは何かを見ていきたい。」
活動内容	「児童の実態等の共通点・相違点を見出す」	「現場の実態に応じた教師の教育実践活動を学ぶ」	「学校文化の共通点・相違点を見出す」

ンをおこなった。実習後には、他の小学校に実習に行った学生たちと交流の場を持つことで、情報の共有を図った。その上で、FWⅡで得られた経験や学びを「各自の課題」に即して考察し、そこから新たに得られた課題は何かをレポートとしてまとめた。そして、成果発表会でこの実習成果を報告した。

では、FWⅠと教育実習のそれぞれの実習経験から得られた課題と変容にはどのようなものがあったのか。これらについては、昨年度の報告から引用する。FWⅠにおける学生の課題には、「①指導案の書き方に慣れる」「②子どもの身近な題材・実態に応じた教材で授業をする」「③相手に伝わるように話す」という指導案作成・教材づくり・発問内容の検討といった授業づくりに関する3項目が挙げられていた⁽³⁾。教育実習では、「子どもとの関わり方・授業のつくり方に対して高い意識を持って取り組む姿勢」が見られ、「子どもに向かっていった意識が、教師の子どもに対する対応や授業環境のつくり方というようなところまで広がる」という変容が見られた⁽⁴⁾。

FWⅡのオリエンテーション時には、これまでの実習経験から得られた「各自の課題」と、FWⅡの活動内容とを関連させながら考察していくように促した。FWⅡの活動内容とは、①学校文化や地域性、教師や児童の実態等の共通点や相違点を見出すこと、②現場での実態に応じた教師の教育実践活動について体験を通して学び、深く考察すること、である。オリエンテーション時に学生が挙げた「各自の課題」は、主に《子ども》《教師》《学校》に関する事柄で

あった。これらの課題は、FWⅡの活動内容と関連した事柄であり、活動内容を意識しながら「各自の課題」を設定していることがわかる(表5参照)。

(2) FWⅡにおける成果と課題

FWⅡにおける学びの成果の一つとして、学校文化や地域性の違いを意識することで、学校の特色や学びの環境の多様性について考察するようになったことが挙げられる。2011年度は8校の小学校に分かれての実施であったため、他校での実習の様子がわからず、自分が実習している学校の特色が何かを把握しづらい様子が見て取れた。そこで学生同士で情報を共有する場(学校間交流会)を持つことで、学校毎の特色が浮き彫りとなった。交流会では、小学校内の掲示物や授業観察で得られた情報から、その学校の学校文化は何かを見出そうとする姿が見られた。

例えば、多国籍の児童が在籍する小学校での、英語の掲示物の多さに注目したことから、日本語での会話に支援がいる児童がいることに意識が向くということがあった。そこから、日本語に支援が必要な児童に対する日本語学習の取り組みが学校の特色の一つではないか、と捉えるようになる姿が見られた。また、離島の小学校での実習について交流が行われた際には、他の学生から複式学級について高い関心を示されたことで、子どもたちの人数が少ない離島の小学校の現状について振り返っていく様子が見られた。

このように各小学校の実態を交流すること

で、学校の特色や地域と学校との関係性について考察する姿がみられ、情報共有を契機に、学校文化の違いや学びの環境の多様性に対する意識に高まりが見られた。さらには、児童の実態について交流する中で、どのような学習環境であっても「子どもの本質はみな同じ」ではないかと捉えるなど、共通点についても考察を深めていく姿が見られた。

もう一つの学びの成果は、教師の仕事に対する捉え方の変容である。特別支援学級に配属となった学生は、子どもの集中力を持続する為の教室の環境づくりや、子どものやる気を引き出すための「ほめる」という教師の対応について、「自分が教師になったら」という視点でレポートをまとめていた。このレポートでは、子どもの意欲を引き出そうとする教師の対応は、特別支援学級での教育活動に限らず、どの教育活動においても重要なことであると結論づけている。さらには、普通学級の担任教員と特別支援学級の担任教員との連携の重要性にも言及し、様々な子どもに対応していかなくはない教師の在りようについても深い考察が見られた。このレポートを作成した学生は、成果発表会において、授業時間に教室の外に飛び出した子どもへの対応について、実際の現場教師の対応を振り返ってまとめていた。教室を飛び出した子どもに対して、現場の教員がどのように声かけをしているかの一例を挙げ、その子の興味・関心を把握することや教師同士の連携の大切さを意識したまとめとなっていた。

成果発表後のアンケート（一部抜粋）

- 教師の裏側の仕事について、今回配属された小学校の先生方のように縦や横の連携を大切に、日々の業務をこなしていきたいと考えました。例えば、自分の学年の先生方との連携だけでなく、他の学年の先生方とも積極的にコミュニケーションを取りながら、他の学年の実態等も把握して、そこから学校全体が抱えている課題についても把握するようにしたいと考えました。
- FWⅡでは、具体的な教師像、採用された後の教師としてのやるべき事、考えるべき事などが、具体的な「形」として見えてきました。FWⅡでの経験を生かして、今後は原点回帰ではないですが、教師としてのやるべき事をより具体的に考えていきたいです。

成果発表会後に実施したアンケートからは、教師同士の連携、情報共有による実態把握の重要性といった、教師の仕事に対する、より具体的且つ広い視野での捉えが見えてくる。また、実際に教師として働いていく姿を想定した記述がいくつもあった（資料1参照）。

以上のことから、FWⅡ(2011年度実施)における学びの成果として、主に2点が挙げられる。

- ①学校毎の特色や多様な学びの環境について実感を伴った考察をするようになった。
- ②教師の仕事について深く考えるようになり、より具体的な教師像を持てるようになった。

また、FWⅡでは授業以外の諸活動を体験する機会も多い。子どもへの直接的な関わりだけでなく、現場の教員と交流し、地域との関わりがある学校イベントに参加することで、地域における学校や教師の役割について考えさせる体験となったことが伺える。

さらに2011年度実施の公立小学校（計8校）から実習終了後にフィードバックされた意見からは、前向きに学生を受け入れて頂いたことが伺える。学生と受入小学校双方の反応から、FWⅡにおける公立小学校での実習がキャリア教育としても機能していることがわかる。教育実践を段階的に経験することで、教育現場で求められる柔軟な実践力を身に付けていることも見えてきた。

公立小学校教員からのフィードバック

- 教育実習を含めて様々な実践を積んでいるので、子どもへの関わり方に安心感がある。
- 現場で求められる様々な事柄について、柔軟に対応して動くことが出来る。
- 子どもを見る目が増えて、忙しい現場の助けとなる。
- 将来の教員として期待でき、キャリア教育に繋がる。

しかし、FWⅡ実施に際しては、課題も見えてきた。FWⅡは複数の学校で実施されるため、その内容に質的な差異が生じたということが挙

げられる。教育的に効果のある処遇を全ての学生が享受できるよう、学びの質を保証する必要があると考える。例えば、大学と実施校・実習生と教員・実習生同士の連絡をより密にしていくなどの対策が考えられる。現場での実情に合わせて運営される科目の特性をどのように生かしていくかが今後の課題となる。本稿執筆時はFWIIの2年目の実践がまさに行われている最中であり、今後も継続的に公立小学校と連携し実践する予定である。よって、今後も現場教員との連携が継続的に行われることで、学校や現場教員との信頼関係が構築されていくことが期待され、それにより安定的な学びの質の保証が出来ると考える。

(3) 今後の展望

FWIIの総括である成果発表後のアンケートからは、履修学生が新たな課題を設定することが出来ていることも見えてきた。

FWIIで得られた新たな課題は、FWI・教育実習と実習経験を積み重ねたことで、より詳細で具体的なものとなったと考えられる。そして、これらの新たな課題は、4年次の選択実習や卒業研究に生かされていくことが期待される。さらには、現場と深い関わりを持った課題意識について考察を進めていくことは、実際の教師として教壇に立つ際の核となると考える。

成果発表後のアンケート（一部抜粋）

「今後は、この経験を生かして、通常の学級にも所属する、LD、ADHDへの配慮、この児童にあった手立て、支援を心がけていきたいです。教師の負担の大きさ、余裕のなさは教育実習やFWIででも感じました。しかし、諦めずに、その子を見守る姿勢を今回担任の先生から学ぶことができました。そのために、まだまだ不十分である、特別支援に対する知識を少しでも豊かにしていきたいです。」

おわりに

教育実践学専修の学生たちは教職体験I、教職体験II、そしてFWIのなかで、まずは観察を通して学校教育の世界に入り、教師の仕事を理解し、子どもたちへと近づいていく。そうし

た観察の後に、FWIは朝の会で子どもたちの前で話してみるという体験の機会を学生に提供する。子どもたちの前で話すことでさえ難しかった学生が、やがて指導案を作成し、実際に授業実践体験を1回おこなうところまで成長する。指導案通りに授業することさえままならない体験をしながら、学生たちはいつしか指導案通りに流す授業を超えて子どもたちと創り出す授業をめざすようになる。教育実習を経た後のFWIIでねらいとされる柔軟な実践力とは、たとえばこのような豊かな学びを創りだそうとすることをも意味している。そして多様な地域・学校・教員集団・子どもたちに触れることで、FWIIは学生たちの視野をさらに広げて、彼らに新たな課題を示してくれる。さらに興味深いことに、FWIや教育実習では「指導教員－実習生」だった関係性が、FWIIでは配属先の学校教員と同僚としてコミュニケーションをとり、一緒に働くという意識が芽生えた学生さえいたという。こうした学生たちの声や姿は、教職体験I・IIからFWI、学校教育実践研究、教育実習、そしてFWIIという一連のカリキュラムが有意義な学びの機会を学生に提供している証左だと受け止めている。

平成24年8月にだされた中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、これからの教員に求められる資質能力として、「教科や教職に関する高度な専門的知識」や、「新たな学びを展開できる実践的指導力」が挙げられているが、こうした高度な専門的知識や、新たな学びを展開できる実践的指導力を育成するためには、「教科や教職についての基礎・基本を踏まえた理論と実践の往還による教員養成の高度化が必要である」と謳われている⁽⁵⁾。FWI・IIのような実習科目を中核とした理論と実践（あるいは実践と理論）との往還的な学びは、教員養成を考える際の重要なカギであるといっても過言ではないだろう。

FWI・IIにおいて、教育実践学専修の学生たちは観察を通して子ども理解を深め、授業実

践に代表されるような実践経験を積み、豊かな学びのある授業を創り出すことの大切さと困難さを実感し、教員になるという意欲・動機づ

けが強化されている。もちろん、課題もまだ山積である。理論と実践の往還を謳ってはいるが、大学の講義と実習科目の間でそれが学習プロセ

資料1 学習成果発表会後のアンケート（原文のまま転記）

「小学校教育フィールドワークⅡ」の発表会を終えて	
この発表会で、「子どもの本質はみな同じ」という言葉が印象に残りました。附属と公立を今まで比べてしまいがちでしたが、子ども自身は、何にも変わらず、変わるのは環境なのだなと感じた。特別支援学級を見ましたが、何もやりたくない、と無気力な子どもも、教師の工夫次第で、意欲的にすることができました。それは通常の学級でも同じことだと思います。それこそ、A先生のおっしゃっていた、「あぶりとかるび」と同じ原理だと思いました。今後は、この経験を生かして、通常の学級にも所属する、LD、ADHDへの配慮、この児童にあった手立て、支援を心がけていきたいです。教師の負担の大きさ、余裕のなさは教育実習やFWⅠでも感じました。しかし、諦めずに、その子を見守る姿勢を今回担任の先生から学ぶことができました。そのために、まだまだ不十分である、特別支援に対する知識を少しでも豊かにしていきたいです。	
教師の裏側の仕事について、今回配属された小学校の先生方のように縦や横の連携を大切にして、日々の業務をこなしていきたいと考えました。例えば、自分の学年の先生方との連携だけでなく、他の学年の先生方とも積極的にコミュニケーションを取りながら、他の学年の実態等も把握して、そこから学校全体が抱えている課題についても把握するようにしたいと考えました。又、K先生もおっしゃっていたように丸つけにも一工夫加えるなど、自分なりに今回の経験から発展させていきたいと考えました。	
<ul style="list-style-type: none">・一つの学年で4クラス均等に見せてもらったことで、それぞれの教師の学級づくりを見ることができ、様々な方法を知ることができた。・おとなしい子ほど声をかけてあげ、子ども全体の把握に心がけること。・裏がわでの教師の仕事を体験させてもらったり、実習をしたことで、教材研究の大切さを知り、教師の目線で、担任とはなすことができた。・学芸会への取り組みを見せてもらったことで、普段のカリキュラムもあるなかで、他のとりくみを行う大変さ、教師の効率のよさ、計画性とわれると感じました。・丸つけなど、実習よりも大きな範囲で、教師の仕事を見たことで、様々な課題を見つけました。それに対して、自分でも考えますが、より実践的なものを知りたいので、公立、附属を含め、たくさん観察したいです。	
FWⅡでは、具体的な教師像、採用された後の教師としてのやるべき事、考えるべき事などが、具体的な「形」として見えてきました。FWⅡでの経験を生かして、今後は原点回帰ではないですが、教師としてのやるべき事をより具体的に考えていきたいです。	
改めて感じたこととしては、子どもはどの小学校においても変わらないということと、教師の仕事は授業だけではないということだった。素直さであったり、興味・関心といったものは特に変わらず、それがよく見られるのは休み時間といった授業以外の時間であった。教師の仕事に関しては、他学校からの発表からも感じられた通り、時間がいくらあっても足りないように感じた。FWⅡを通して、現場の忙しさをより感じる事ができたと思う。	
授業だけでなく、学級経営など、教師の仕事そのものにとっても興味を持ちました。学級経営や、事務的な活動にも目を向けて、自分ならどう行っていくかという視点を持っていきたい。	
今回、小学校教育フィールドワークⅡを終えて「教師」という仕事の大変さ、忙しさ、そしてやりがいなど、多くのことを学ぶことができました。授業はできませんでしたが、休み時間の子どもたちとのかかわりであったりとか、学芸会という大きな学校行事に補助として参加することができて、今までの視点が「授業」中心であった為、見えなかったことが多く見る事ができました。雑務の多さや、その大変さは正直予想以上でしたが、子どもたちの笑顔が、やはり教師の原動力になるということを実感しました。今後は、「授業」にかたむいた視点を、「教師」という風に広げて、日々精進していきたいと思えます。	
<ul style="list-style-type: none">・公立小学校の雰囲気が感じられた。・通常学級で、教室をぬけだす児童や不登校の児童がいて、担任になった時のために準備が必要だとも思った。・特別支援の児童に対して、支援の方法やどんな児童らがいるのかなど、現場の先生の対応を見ることができた。正しい知識・経験が必要だと感じた。・一人で抱えこまずに、周りの先生方と協力しあうことが大切だと思った。・FWⅡでは一人一人が全く違う体験をしていたことが分かったので、個別に話をきいて、さまざまな学校の様子を知りたいと思う。	

スとして成立しているというためには、さらなる工夫が必要となるだろう。こうした課題については、機会を改めて報告したい。

【附記】

本稿の一部は、平成 24(2012)年度日本教育大学協会研究集会にて研究発表したものである。

なお本論文は、琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要 20 号に掲載された筆者らの同名論文が、査読結果を受けて大幅に加筆修正し、九州地区国立大学教育系・文系研究論文集に掲載されるものである。

【註】

- (1)上村豊・浅井玲子・小川由美・仲間正浩・上地完治・加藤好一・道田泰司・村上呂里・小田切忠人・藤原幸男・吉田安規良「小学校教員養成に特化した学生教育組織とカリキュラム・専門科目開発の試み—理論と実践の往還をめざした教育実践学専修設立の経緯と特色ある必修科目—」『日本教育大学協会研究年報』第 30 集、2012 年、169-182 頁。
- (2)山田浩之・櫻田裕美子「教職意識の特徴」藤井泰・作田良三編『地域発展を担う教師の養成段階における能力形成過程』松山大学総合研究所、2012 年、28 頁。
- (3)上村・浅井・小川・仲間・上地・加藤・道田・村上・小田切・藤原・吉田、前掲論文、179 頁。
- (4)同上。
- (5)中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」2012 年 8 月答申。